頑張る会員

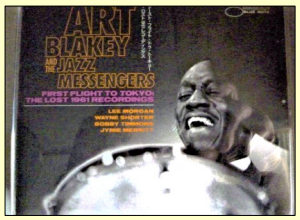
モダンジャズと私

宮澤（みやざわ）　文雄（ふみお）（東中地区）

＜出会い＞ ‘50年後半受験勉強の合間に聴いた「FEN」放送から躍動する心地よい音楽「ジャズ」。入社後東京勤務になり仕事と両立しながら“どっぷり“　モダンジャズに浸ることになる。＜モダンジャズの魅力＞　1900年代の米国、奴隷たち（有色人種）は搾取され過酷な労働・生活を余儀なくされていた。彼等はつかの間の休息を音楽で心を癒し喜怒哀楽を表現、独自のジャンルを築き＝40年後半から50年代に派生した独創的でそれまでの音楽にはなかった「アドリブ＝即興演奏」を取り入れ芸術領域を確立。ジャズは「黒人の魂の叫び」で一音一音の演奏（表現）は崇高な精神の塊でもある。多くの曲・演奏の記録は60年以降私を魅了し続けている。ジャズ評論家 油井正一氏・大橋巨泉氏・湯川れい子氏などの真摯なアドバイスが心の糧になっている。

＜私を魅了したジャズマン＞　アート・ブレーキー氏（ドラマ）である。1960年12月30日初来日。２週間余の日本公演。彼の来日が日本のモダンジャズの礎となり今日に至っている。彼等が日本（公演を含む）で感じたことは『差別のない美しい国・人々（聴衆）だった』帰国の飛行機の中でメンバー全員が号泣したと言われている。以降、親日家として数十回来日公演を行いヨーロッパでも成功を収め名実ともにモダンジャズ界の巨人（レジェンド）で多くの若手人材を育てジャズ芸術の継承に貢献。

＜結び＞「平和は関係ない、　金だ」（当時の駐英米大使談）のような国で今も人種差別・偏見を受けながらジャズ文化は進化しており 先人達の歴史に学びジャズの価値を後世に伝えた。「寓者は経験に学び賢者は歴史に学ぶ」（ビスマルク）。この原稿執筆中もバックグランドでピアノトリオの穏やかな調べが流れている。



ずっと鑑賞し続けたい。

【写真の説明】
（左側）アート・ブレーキー＆ジャズメッセンジャーズ
　　60ぶりに発掘された1961年初来日公演・秘蔵ＣＤ
（右側）ジャズ専門誌「スイングジャーナル誌」約850冊

頑張る会員

「御朱印」と「ミニ提灯」の収集

筒井（つつい）　博文（ひろふみ）（東北地区）

30年程前東京に単身赴任していた頃、たまたま柴又帝釈天を訪れた時に「御朱印」の存在を知り急に興味が湧いてきた。以降、旅行や出張で地方に出かけた時は必ずその地域で有名な寺院または神社に立ち寄って御朱印を頂くことなった。御朱印帳を持参してそこに記載していただいた後、一つ一つの御朱印を切り離し、アルバム台紙に張り付けるとともに、そこに現地で撮影した写真と簡単な説明文を添えてアルバムとする作業を続けてきて、この30年間でアルバム帳も15冊にもなった。また西国33ヶ所巡りでは掛け軸に御朱印を記載していただき、満願達成後に掛け軸の表装仕上げを行って、お盆の時期には我が家の部屋に飾っている。

また「ミニ提灯」については、これも40年以上前に家族旅行で倉敷を訪れた時、土産物店でかわいい提灯を見つけ、これを集めてみようと思いついた。以降、上記同様に旅行や出張で地方に出かけた時に土産物店等でミニ提灯を買い求めた。集めた提灯は本棚に並べたり吊るしたりして飾ってあり、その棚は５段程になった。

両方の収集活動は30年以上も継続してきたが、この３年間程はコロナ禍で外出機会が激減したため、その活動は停滞したままである。しかしコロナの収束を見通せるようになってくれば、また再開しようと思っている。

【写真の説明】
（左側）御朱印のアルバム
（右側）本棚に飾られたミニ提灯